

前 奏 黙想	讃美歌 98 あめにはさかえ
讃美歌 102 もろびと声あげ	入会式 日本基督教団信仰告白
祈 禱	讃美歌 402 主のしもべの
主の祈り 564	献 金
聖 書 イザヤ書 7:14	讃 詠 547 いまささぐるそなえものを
ルカによる福音書 2:1~7	黙 禱
讃美歌 114 あめなる神には	頌 栄 544 あまつみたみも
説 教 『あなたの飼い葉桶の傍らで』	祝 禱
祈 禱	後 奏

「キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になられた。人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで、従順だった(フィリ 2:6~8)」。まさしく、これがクリスマス。

「彼らがベツレヘムにいるうちに、マリアは月が満ちて、初めての子を産み、布にくるんで飼い葉桶に寝かせた。宿屋には彼らの泊まる場所がなかったからである(ルカ2:6~7)」。この降誕の場面は「自分を無にして、僕の身分になった」キリストの初めの姿を物語っている。その状況を見てみよう。人頭税をくまなく徴収するための、ローマ帝国の住民登録が行われた(2:1)。そのためにヨセフとマリアはガリラヤからはるばるベツレヘムまで行く必要があり、身重のマリアにとっては過酷な旅程だった。

それだけではない。相手の分からない子を宿したマリアの噂は、ヨセフの故郷にも届いていて、親族は軒並み彼らを拒絶した。ならば宿屋かと探しても、木賃宿も相部屋さえ提供してくれない(2:7)。家畜小屋に泊まるみじめさよりも、本来ならば歓迎してくれるはずの親族からの拒否、人々の蔑みが若い二人の心に突き刺さる。そんな「針のムシロ」のただ中に、救い主キリストはお生まれになった。

「十字架の死に至るまで従順だった(フィリ 2:8)」キリストは、生まれた時から人々に排斥される場におられた。「神と等しい者が、自分を無にして僕の身分(2:6~7)」になることのアマリの落差。クリスマスは、それを地上の現実として露わにする。降誕の飼い葉桶の上には、十字架の影が落ちていた。

改めてクリスマスの情景を思い描いてみよう。ベツレヘムの家畜小屋、飼い葉桶に眠る幼子イエス。その傍らにはマリアとヨセフ。マリアはこの子の偉大さを天使から告げられているが(ルカ1:32~33)、そんなことは忘れていた。無力で無邪気な幼子イエスと、無口な夫ヨセフが共にいて充足していた。救いの光(ヨハネ1:9)が灰かに灯る家畜小屋。そんな家畜小屋の、外側の世界はどうなっているだろうか。

「そのころ、皇帝アウグストゥスから全領土の住民に、登録せよとの勅令が出た(ルカ2:1)」。ローマ帝国を牛耳る絶大な権力と、税徴収される膨大な民の移動。広大な帝国をグーグルマップで概観し、あの家畜小屋へググッとフォーカスしてみよう。飼い葉桶にイエスは眠り、傍らにマリアとヨセフがいる。なんと極端なコントラストか。イエスはキリストであるゆえに、どこにでも灯される救いの光。どの町の、どの家庭の、独りぼっちの、野宿者において(2:8)、灰かに灯っている光ではないのか。

キリストは「僕の身分になり、人間と同じ者になられた(フィリ 2:7)」。皆さん一人ひとりがクリスマスの奇跡に出会うのは「僕の間」。その場はどこにあるのか。信頼し合える兄弟姉妹の間でさえなく、もっと孤独で、理解されない「僕としての私」の所か。ただ東方の占星術学者も羊飼いか、空虚を抱えた「私たち」であった。すなわち私たちという教会にあつてこそ、私は僕になることができる。

僕の灰かな光を迎える備えとして、どうか沈黙してほしい。人間的な能力や手柄、栄誉や善行を手放そう。静寂な家畜小屋、あなた自身の慎ましい「飼い葉桶」の傍らに黙って立っていてほしい。神から与えられるしるし「インマヌエル/神が共におられる(イザヤ7:14)」救いに捉えられるであろう。

若い頃 クリスマス時期に漂泊していた 雪が積もっていつそう静かな町を 夕刻に黙々と歩いた
 家々の窓の明かり どの家もベツレヘムの家畜小屋に思えた そんな寂しい旅をしたかったらしい
 本日礼拝後に年末大掃除をします。多分1時間弱か、参加可能な範囲でよろしくお願ひします。
 次主日 12/22 は降誕祭礼拝、聖餐式をおこないます。12/21(土)1:30~3:30 メディカルカフェ。

礼拝堂・集会所の住所：408-0012 山梨県北杜市高根町箕輪 2265-3
 連絡・問い合わせは牧師へ：408-0205 北杜市明野町浅尾新田 1324 TEL 0551-25-4008
 eメールは komechan.olive@gmail.com HPは「日本基督教団八ヶ岳教会」で検索して下さい。